



枕草子抄

十二終





寂びゆくきりけり
 ぞいお暇小まづり入
 里亭よ出あつたま
 びりしはゆふのさ
 里亭乃りよきと物
 づ人をおひすま
 らひてまゑまると
 たり

又しらうらうら人もあ
 とい 彼もやう人も
 事しきさの思きあ
 こと
 まいんねの 彼文社
 人乃直をれはくま
 つるす
 せり思ひてやんあ
 主の思ひてあつた
 主の思ひてあつた



寂びゆくきりけり
 ぞいお暇小まづり入
 里亭よ出あつたま
 びりしはゆふのさ
 里亭乃りよきと物
 づ人をおひすま
 らひてまゑまると
 たり
 寂びゆくきりけり
 ぞいお暇小まづり入
 里亭よ出あつたま
 びりしはゆふのさ
 里亭乃りよきと物
 づ人をおひすま
 らひてまゑまると
 たり
 寂びゆくきりけり
 ぞいお暇小まづり入
 里亭よ出あつたま
 びりしはゆふのさ
 里亭乃りよきと物
 づ人をおひすま
 らひてまゑまると
 たり

ついでに骨肉の
取を海たる六道羅の
悪人かれいふこと人
あゝと強ひてまゝに
ほ人のついでとせよや

七月十五日 妙人をま
五箇盆経云以百味飲
食安五箇盆中施十
方自恣僧云事根
係云五葉無花語也
倒懸救器と翻譯也

倒懸ハさういふく
餓飢乃若一牛をさ
つては佛才子月蓮始
て六通を以て

を身を生かすを
せん事を求りて七月
十五日に自恣乃修を
供養せし解脱を以て
説

多し一より五箇盆
経より及して上下畧
る余阿志なり 作者
部類云右大将道綱男
天王寺別當と撰撰も
御たを載

等すべし十代の集の
作者なり

わろくしり親を
こめぬといはんとし
親を子とて物れと
いふは道乃 悪人あ
がううと金有り悪
念をいふと善業を
あはれ

鐵海威罪のこゝろ
をよめり

小野乃女上 乞太直
大将乃細の女上 細
をよめりといひ

普門寺 五葉新
又乃日小野乃 捨遣
集いしこの河をよめ
小野乃乃乃乃

上白のまの乃乃八
條の
提婆品捨新設食乃
車也 尺その若も
ておんせし時求法
の志傳して阿私仙
人

はくくくくくくく
下白ハ王質ハ山中
下白ハ王質ハ山中
下白ハ王質ハ山中
下白ハ王質ハ山中

事也 舟の心ハ乃乃
捨の心ハ乃乃捨の
心ハ乃乃捨の心ハ
乃乃捨の心ハ乃乃
捨の心ハ乃乃捨の
心ハ乃乃捨の心ハ

と也 うちうちと
比の尋と無めと
り中徹書既物
忍ハ乃乃 躬垣
市岡

人乃心うがりあ
七月十五日 妙人をま
又多し一より五箇
わろくしり親を
を身を生かすを
せん事を求りて七月
十五日に自恣乃修を
供養せし解脱を以て
説

多し一より五箇盆
経より及して上下畧
る余阿志なり 作者
部類云右大将道綱男
天王寺別當と撰撰も
御たを載

等すべし十代の集の
作者なり

わろくしり親を
こめぬといはんとし
親を子とて物れと
いふは道乃 悪人あ
がううと金有り悪
念をいふと善業を
あはれ

鐵海威罪のこゝろ
をよめり

小野乃女上 乞太直
大将乃細の女上 細
をよめりといひ

普門寺 五葉新
又乃日小野乃 捨遣
集いしこの河をよめ
小野乃乃乃乃

上白のまの乃乃八
條の
提婆品捨新設食乃
車也 尺その若も
ておんせし時求法
の志傳して阿私仙
人

はくくくくくくく
下白ハ王質ハ山中
下白ハ王質ハ山中
下白ハ王質ハ山中

事也 舟の心ハ乃乃
捨の心ハ乃乃捨の
心ハ乃乃捨の心ハ
乃乃捨の心ハ乃乃
捨の心ハ乃乃捨の
心ハ乃乃捨の心ハ

と也 うちうちと
比の尋と無めと
り中徹書既物
忍ハ乃乃 躬垣
市岡

又豊平の母乃乃乃
のまの乃乃乃乃乃

又豊平の母乃乃乃
のまの乃乃乃乃乃

又豊平の母乃乃乃
のまの乃乃乃乃乃

又豊平の母乃乃乃
のまの乃乃乃乃乃

朗詠曉乃部よ
佳人盡飾於晨粧ササ
魏宮鐘動遊子猶
行於殘月函谷鷄
鳴ウれ賈鳩ウ曉乃
賦ウ乃句ウ

信那の君れれあみの
人トとトもに信がと成
匠殿乃れ房トと成
とて乳母のあをを
とて乳母のあをを
とて乳母のあをを

寄居虫 ちいれも貝の
申にやわすむ出也
長明方丈記ウが
ちいれも貝をの
とて乳母のあをを
とて乳母のあをを

みまうととととと
いさ乃れ信信練ト
とて乳母のあをを
とて乳母のあをを
とて乳母のあをを
とて乳母のあをを

あをのちり乃月よけ

むとたんと多る又いづらうぞと

かやう乃るりやいよととわい

まごいづらうれいおろしめを

信那乃君れれあみの

どのとけおなわされおのこ

板まのをもちりこちり

月をえささひつる

乃れあををいづらう

おろしめをいづらう

乃れあををいづらう

乃れあををいづらう

乃れあををいづらう

乃れあををいづらう

乃れあををいづらう

乃れあををいづらう

乃れあををいづらう

乃れあををいづらう

乃れあををいづらう

乃れあををいづらう

乃れあををいづらう

乃れあををいづらう

乃れあををいづらう

観世音菩薩と今

山陀羅尼を誦して

子満りはるかに

悉皆消滅せんとわ

細くつやめきく独

をわきしにもせし

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

をいづらひひさ

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

さるまじくまじら

しつとひいひいひい
あつとひいひいひい
しつとひいひいひい

人あつとひいひい
あつとひいひいひい
しつとひいひいひい

世の類ひ物の中
あつとひいひいひい
しつとひいひいひい

あつとひいひいひい
しつとひいひいひい
あつとひいひいひい

あつとひいひいひい
しつとひいひいひい
あつとひいひいひい

あつとひいひいひい
しつとひいひいひい
あつとひいひいひい

あつとひいひいひい
しつとひいひいひい
あつとひいひいひい

あつとひいひいひい
しつとひいひいひい
あつとひいひいひい

あつとひいひいひい
しつとひいひいひい
あつとひいひいひい

あつとひいひいひい
しつとひいひいひい
あつとひいひいひい

あつとひいひいひい
しつとひいひいひい
あつとひいひいひい

あつとひいひいひい
しつとひいひいひい
あつとひいひいひい

あつとひいひいひい
しつとひいひいひい
あつとひいひいひい

あつとひいひいひい
しつとひいひいひい
あつとひいひいひい

法少納言枕草子者中古之遺風和語之後列也
并美於家女源氏物語尤當因然之者也然亦有
選其義按其部考其辭者惜乎蓋有之未見之
而自畫案好讀無教志為訓釋故平日覽古集
每有意會則引奉題書就思傍訊槩宣意或
遂以自出字以成十二事以春曙抄為名稱有
類而闕如之者惟物更待後之博洽不強駁詭
今也浪陸俗美風雅感起幸遇以時命之形梓
庶流傳于市井也庶幾復和并之人做其詞花
効古風流云尔

延寶二年甲寅七月十七日

山村季以出

